

アポロン達の午餐

赤江 瀑



アポロン達の午餐

赤江 瀑



文藝春秋

赤江 瀑（あかえ・ばく）

1933（昭和8）年下関に生まれる。日本大学演劇科卒。70年「ニジンスキーの手」で第15回小説現代新人賞を受賞。73年「罪喰い」、75年『金環食の影飾り』で直木賞候補となる。74年『オイディプスの刃』で第1回角川小説賞を受賞。著書に『獣林寺妖変』『美神たちの黄泉』『ポセイドン変幻』『鬼恋童』『熱帯雨林の客』『正倉院の矢』『蝶の骨』『青帝の鈴』『野ざらし百鬼行』『上空の城』などがある。

アポロン達の午餐

昭和五十三年三月三十日 第一刷

定価 九五〇円

著者 赤江 瀑

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話（〇三）二六五・二二一

印刷 凸版印刷

製本所 和田製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

アポロン達の午餐／目次

アポロン達の午餐

5

シヴァの暴風

53

双頭の動物の門

97

彷徨える魔王

181

初出誌一覧

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 「アボロン達の午餐」(「アボロン達の昼」改題) | 小説現代昭和四十九年一月号 |
| 「シヴァの暴風」 | 小説現代昭和四十八年五月号 |
| 「双頭の動物の門」 | 高二コース昭和五十一年九月号〜五十二年一月号 |
| 「彷徨える魔王」 | 別冊小説新潮昭和四十八年春季号 |

アポロン達の午餐

裝幀
建石修志

アポロン達の午^ご餐^{さん}



彼等、監物美臣の学友達は、完全に素っ裸で、なにひとつ体につけてはいなかった。生まれてきた時のままの、晴れやかで、無邪気な、くつろいだ恰好で、思い思いの仕事に熱中していた。

一人は、イヤホンで、自家製のセクシユアル・テープの再生音を聴いていたし、一人は、鉢植えのオオマツヨイグサのしげみの葉かげで、うつぶせに2Bの鉛筆を握りしめたまま新英和大辞典のページに頭をおとして睡っていた。別の一人は、ひらいた股間にサンドベエパアをひろげ、灰白色のぎらつく鋭い粉末を撒きちらしながら、手製の鋏を研いでいた。

そして、美臣に、立ちあがりながらこの真夏の光で灼け熟れている部屋の扉を開けてくれた最後の一人の学友は、口中いっぱいアイスクリームのような猛烈な泡をかきたてて、ナイロンブラシで歯を磨いていた。象牙いろの、精悍な歯だ。

「ヨウ」

と、その学友がいった。

「ヤア」

と、屈託なく、美臣も応え返した。

応えながら、シャツはもう脱ぎ捨てていた。Gバンの留金のはじける音が、やがて間もなく美臣の気を、まちがいなくそぞろにさせる……。

彼等、監物美臣の学友達、五人の仲間づきあいには、いつもおおよそ、こんなふうにして始まった。

Ⅰ

事件は八月一日の真昼どき、本州西端部にある海峡都市S市の最も繁華な街角の路上で、正午のサイレンが鳴り終った直後に起こった。

市内目抜き通りN町の十字路交差点から百メートルばかり東寄りの路上で、西から東へ向けて疾走中の大型運送トラックが、高校三年生の若者を轢き殺した。殺された時、高校生は体に何もつけてはいなかった。全裸だった。

轢き殺した大型トラックの運転手は、その時の様子を、若者が素裸のまま、いきなり猛然と車体の前面におどり出てきたと、陳述した。咄嗟の出来事で、手の打ちようは全くなかったと言いつ張っている。

だが、この全裸の高校生が道路を横断する姿を、当時、誰一人目撃した者はいなかった。

S駅前へ通ずる一本筋の主幹道路で、道幅もひろく、見通しも充分にきく、いわば白昼表通りでの出来事であり、商店街やビルの舗道にはかなりな人出があったと思われるだけに、この陳述

の食い違いは、さまざまな臆測^{おくそく}や取沙汰を世間によんで、それでも風変りな事件の趣^{おもむ}きに、いっそう奇妙な生彩をまきちらす結果となり、担当の警察官を悩ませた。

私が、たまたま校医をしている市内の有名高校で、昨年の春から教鞭をとっている友人の楠波^{くすななみ}が私をたずねてやってきたのは、そうした世間の噂もやっと下火になり、人々も事件を忘れかけようとしていた、季節もすでに秋口をだいいぶ入った頃のことである。

楠波は二時間ばかり話し込み、数片の大学ノートの切れっぱしと、焼きの悪い原板切りの写真一葉、別に一枚の便箋紙の入った封筒とを、私の診察室の机の上に残して帰っていった。

久し振^{ふる}りだし、街に出て一パイやろうとしきりにすすめたのだが、

「いや、この次にして下さい。近い内にまた寄ります。君は精神分析の方も専門家だし、ぜひ相談に乗って欲しいんです。正直言^{まこと}って、私には手にあまるケースなんで……」

と、彼はすっかり意気消沈して辞退した。

楠波の帰った後、急患が二つばかりあり、完全に私の手が空いたのは、夜の十時を過ぎていた。憔悴^{せうすい}した顔に真剣な表情をみなぎらせた楠波の、思いつめた様子が頭のなかに残っていた。

まず、一週間前に、突然楠波のもとへ舞いこんだという差出人不明の封書を、私はもう一度開いてみた。活字の切り抜きを綴り合^あわせた文面で、

——「ヘアポロン」という名称の、裸体クラブをご存じですか。あなたの学校の生徒がつくっている秘密クラブです。調べてごらんになるだけの値打ちはあると思います。念のために、そのスナップを一枚、同封します。

と、言うもので、楠波が置いていった原板切りの小さな写真が、その中へ入っていたというのである。

慌ててシャッターをきったものらしく、薄く二重にブレて不鮮明だが、陽をうけた若葉の山林を走り抜ける全裸の若者の、泳ぐように前傾した体軀が、はっきりと捉えてある。

写真の中の若者は、何かのはずみでこちらを向いたのか、それとも、潜伏者の気配を察知した瞬間でもあったのか、うすく口を開いた顔でカメラの方を振り返っている。遅い鼻梁の線が、強く光線を弾き返して、そのせいで彼の顔は、どことなく獣めいてさえみえた。

「これが、その交通事故で死んだって子？」

「いや、監物じゃないんです。そこに写ってるのは、黒岩といって、やはり私のクラスの生徒です。剣道部の主将でしてね、成績もいい子なんですよ」

「ほう。監物君も成績優秀なんだろう？」

「ええ。監物美臣の方は、これはずば抜けた生徒なんです。三年間、首席を他人に譲ったことはありません。それはいい子です。学校の誇りでした」

その監物美臣の奇怪な死は、結局、突発的な精神錯乱ということでケリがついたのである。その日、水銀柱はうなぎのぼりに上昇し、ちょうど彼が死んだ刻限、市内はうだるような熱気をはらんで、この夏最高の気温を記録したのだという。そう言えば、私にもその日の暑さの記憶はある。休診日で、朝から家でごろごろしていたが、風がなく、じっとしているだけで体中の毛穴からきりもなく汗がふきこぼれ、始末におえぬ日曜だった。医療誌の月報を手にとり、すぐにまた投げ出し、想い出したように何度も意味のない電話をかけに立ち、物置きをひっくり返して庭石に水を撒くゴムホースを引っ張り出したり、テレビのアンテナの向きを変えに屋根に上ったりした。物干台から灼けただれた屋根瓦の上に足を踏み出した時、猛然とあたりにたちのぼったぶあつい攻撃的な熱気の膜のことを、私は想い出していた。

監物美臣は、過度の受験勉強による疲労と、何十年振りかのこの異常高温が重なった結果の、衝動的な錯乱行動——という判断をとられたのだと言う。学校関係者や父兄の奔走で巷間の取沙汰はともかく、表向きは新聞などの扱いも穏便で、

——高校生はねらる

程度の、四、五行記事で、事はおさめられたのである。

「何しろ、監物の事件がやっと表沙汰にならずに済みそうだったので、ホッとしたその矢先の投書でしょ。厭な予感がしましてね……とにかく、黒岩を呼んで問い糾たづしてみたんです」

「実在したの？ 裸体クラブは」

「いや。そんなことは全く知らんと言っんです。ただ、この写真には、誰にどうして写されたかはわからないが、覚えがあると白状しました」

楠波の話によれば、黒岩という学生は、家の近くの山中へ剣道の一人稽古にしょっちゅう出掛ける。人気がない山間で、一汗かいた後、汗まみれの着衣をかなぐり捨て、突然、炎えたつ青葉の中へ身を投げて走り出したい欲望にかられ、それを実行に移したということらしい。写真はその時のものに違いない、と言うのだそうだ。楠波も、そう聞いてみれば、一概に黒岩の行動を非難もできず、結局、投書は悪質な厭がらせだったのかと、判断せざるを得なかった。

「ところが、その翌々日の放課後ですよ。職員室の私の机の上に、この大学ノートの切れっぱし置いてあるんです。読んでみると、監物美臣の日記の一部らしいんです。監物の筆跡です。誰が、どうしてこんなことをするのか……いえ、それよりも、やっぱり監物の死がからんでいたのかと思うと……もう、仕事が手につかなくて……」

楠波の残していった大学ノートの切れっぱしは、ページを裂きとったもので、五、六枚ばかり

あった。

最初の一枚は、いきなりこんな書き出しではじまっていた。

——七月八日。金曜日。快晴。

外胸の肉、及び三角筋に、微妙な隆起。広背筋にも確かな手ざわり。強く大腿四頭筋をつかむ。手ごたえあり。三カ月にしてこの戦果。努力の甲斐あり。心躍る。

——七月九日。土曜日。快晴。

模擬テストの成績発表。首席を堅持。満足感なし。帰校後二十分、主として二頭筋、前膊屈筋と伸筋の集中強化。四時よりヘアポロン。全員集まる。明後日よりの期末テストに備え、五時解散。別れぎわにKの持ち出した提案のこと、頭を離れず。就寝午前三時。

——七月十日。日曜日。晴。

蒸し暑い。午後、急激な通り雨。英、数、国。合間をみては、気晴らしにテレバンダー・トレニング。この筋肉組織鍛錬法は、確かにいい。手軽。場所を選ばず、簡潔に終了する点、我に適す。筋肉への刺激は、大脳皮質への栄養充填行為ならんか？

しきりにヘアポロンを想う。重いランニングシャツ。重いブリーフ。重い……。鉛の如く。鉄の如く。巨大なる岩山の如く！

Kの提案、終日、意識の底にあり。熱く、熱をおびて、我を誘う。何故なりや。恐しくもあり、また、たえがたく素晴らしくもある……。「誘惑」、この二字を思う。

ノートのページは、あと、とりたてて言うこともない日常雑記で埋められているが、その中で

三カ所ばかり、清潔で折目正しい文字が大きく乱れ、粗暴をきわめて書きなぐられている部分がある。インクをたっぷり吸った、そのおどるように乱暴な筆跡は、見逃がせなかった。(前後の關係から、ノートのあちこちを引き破って持ってきたものと思われる)

その部分だけを抜萃^{ばっすい}してみると、

——五月五日。雨。

恐怖。緋牡丹を——

——五月十三日。曇。

緋牡丹!! 哭^なく。

——六月三十日。晴天。

再び、緋牡丹!! 絶望。

と、言う具合になる。

いずれも、唐突な、意味不明の言葉である。

最初の日記体の部分には、そう思つて見れば一見、いかにも裸体クラブの實在を裏付けするような記述が諸処にある。

しかしこの〈恐怖〉と〈緋牡丹〉の件^{くだ}りは、全く理解を絶して、人を寄せつけぬ排撃的な趣きにさえみちていた。私は、こんな風にそれを考えてみた。

五月五日。突然、監物美臣を〈恐怖〉が襲った。彼は、その〈恐怖〉の内容について、何かを書き始めた。〈緋牡丹を——〉と。だが、彼はそこで絶句した。〈恐怖〉のあまりにも大きな衝撃

に打ちひしがれ、それ以上ペンをとることが出来なかったのか……。或いは、何か文字にすることがはばかれるような種類の〈恐怖〉でもあったのか……。

いずれにせよ、この〈緋牡丹〉という言葉は、彼の〈恐怖〉を説明する唯一の手掛かりとみてよいだろう。どんな〈恐怖〉かはわからないが、〈緋牡丹〉と書かれた日付の直後三日間ばかりが、どの場合もとんでいて、いきなり三日乃至は数日後の日付から次の日記の行が始まっていた。〈緋牡丹〉は、彼にとってかなりショッキングな何かの事柄であったに違いない。少なくとも、その度毎に、彼は三日間というもの、日記を記す心境には至れなかったということだけは、はっきりとわかる。

〈恐怖〉

〈哭く〉

〈絶望〉

そして〈緋牡丹〉……。

私は、それらの粗暴な文字をみつめながら、煙草をしきりに幾本もふかした。

投書は、単なる中傷や厭がらせだけではなさそうだ。目的は何かわからないが、とにかく楠波にぞひ裸体クラブのことは知ってもらいたがっている人間がいる。その人間は、どうやら、監物美臣の死について下された判断に、大層不満足らしい。そのことだけは確かだと、そして私は思った。午前二時を少し過ぎていた。

内科診察室の奥に作った、この分析室には、時間というものがない。厚い防音壁と光を通さないカーテンに遮られて、この静かな空間には、昼も夜もは入り込む隙間がない。ここは、不自由な精神の安息所だ。と同時にまた、その精神の闘争場でもある。今迄に数えきれないほど、私は